

秋冬どりタマネギ栽培に関する研究

第3報 直播適応性について

川崎重治・田中龍臣・斎藤久男・脇部秀彦

(佐賀県農業試験場)

仔球を利用した秋冬どりタマネギ栽培については有望品種の登場や秋まきの既存品種でも、仔球の厳選と植付期の組み合わせによって、経済栽培が可能であり、本格的な計画生産が実現出来ることを、先に報告した。本栽培での仔球利用は、安定生産のための唯一の基本技術であるが、仔球養成の省力化は緊急課題であり、早急に解決せねばならない。最近、純度が高く、安定した結球性をもつ新品种の出現とコーティング種子の実用化から、直播栽培の可能性が期待出来るようになったので、本栽培での適応性を、昭和52年から検討中で、実用化が有望であるのでその概要を報告する。

1. 試験方法

供試品種は、育種経過や生態特性の違う代表品種で、低温肥大性の強い「はやて」と、秋まきの極早生品種「キングスター」の2品種とした。は種期は、8月15日と8月25日とし、保温区はハウスを用い11月28日から1月末までフィルムを展張した。は種は、畦幅1.5m、4条、株間10cmになるように点播し、本葉5枚時に一本立とした。施肥量は、三要素ともa当り1kgを全量元肥として施用した。また、かん水は10月下旬以降積極的に行ない、収穫調査は12月29日と1月21日に実施した。なお8月25日植付の仔球利用区(裸地)を対照に比較栽培した。

2. 試験結果

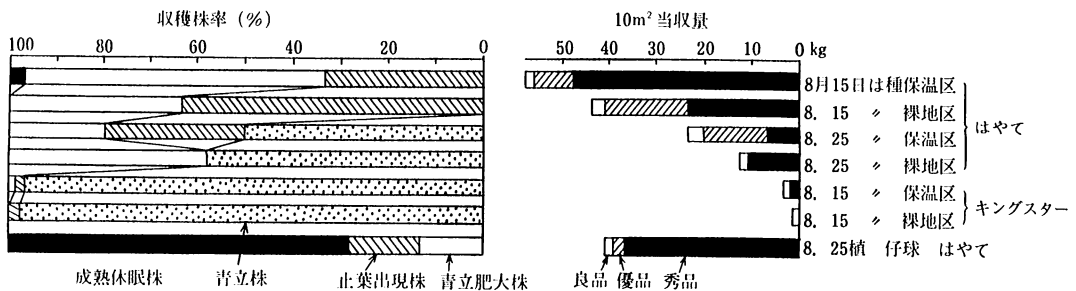
1) 生育 10月中旬に、「はやて」で調査すると、仔球区は葉数5枚、葉鞘径1.2cmで肥大過程に入っていた

が、8月15日直播区は葉数47枚、草たけ39.6cm、葉鞘径1.1cm、8月25日直播区は葉数3.8枚、草たけ28.7cm、葉鞘径0.7cmであった。肥大開始は、11月10日以降で8月15日直播区が早く、特に12月に入って本格化し、保温区程著しく、保温効果が高い。キングスターは、12月以降一部が肥大した。

2) 収穫株率 収穫期は12月20日から1月20日で、収量や品質に関係する青立株は、キングスターでは両は種期ともに100%近い高率を示した。はやては、8月25日直播区の保温区51.6%、裸地区64%と高いが、8月15日直播区では、裸地区で4.5%、保温区ではみられない。成熟休眠株は極めて少なく、はやての8月15日直播の保温区の2.6%であった。止葉出現株や青立肥大株は、はやての8月15日直播区に多い。

や) 上球収量 はやての8月15日直播の保温区が筆頭で53kgを示し、早期結球で中〜小球の多い仔球区を凌駕した。8月15日直播の裸地区は38kgで、8月25日直播保温区は17kg、裸地区は9kgと少ない。キングスターは全く収穫を望めなかった。

以上の結果から低温結球性の強い、はやてを用いた直播栽培は、8月15日は種で約40〜50kgの経済収量が得られ、特に保温区は、球の肥大性がよく、実用化の可能性を認めた。しかし、8月25日は種では大きく減収し、早播が必要であり、更にマルチ栽培で検討中である。



第1図 は種期と収穫株率及び収量調査